



皆さんは「猟師」をしている人たちのリアルを知っているだろうか。我々は、現役の猟師さんに話を伺い、その現状に迫ることを可能とした。

今回、私は厚真町の門脇さん（男性）と群馬県の本間さん（女性）のお二人にお聞きした。門脇さんは趣味で狩猟を始めて33年になるというハンターである。現在は厚真町で直し猟を楽しんでいる。本間さんは東京から狩猟のある暮らしを求めて群馬県に移住し、フレックスタイム制で働きつつ、巻き狩りを楽しんでいる。ゴール

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
北海道・一般												
北海道・猟区												
北海道以外・一般												
北海道以外・猟区												

まず、地域による猟期の違いを見てみよう。鳥獣保護管理法によって、猟期が決められている。インターネットなどでは、鹿の肉は冬のほうが脂が乗って美味しく、寒さがゆえに北海道では一番良い時期の鹿を捕っていないと書かれていた。しかし、門脇さんの話によると、冬に入る前の方が脂肪を蓄えているため、一番脂ののっておいしいということだ。北海道の猟区は他の猟区よりも期間が長い、春先よりも秋が好機であるということだ。それに対し、本間さんは2月から3月が絶好の期間だと考え、肉質だけでなく鹿の革を加工するのにも良いと語る。地域によって、適した狩猟の期間や野生動物の種類は異なるため、自然に左右される印象を持たれる狩猟の中にも選択肢があることは知っておくべきだと感じた。

第一種銃猟免許（銃銃） 第二種銃猟免許（空気銃） わな猟免許 網猟免許

ところで、猟師の免許には4種類ある。私は狩猟で用いる銃といえどライフル銃のような遠方を狙うための銃のイメージだ。本間さんは散弾銃を使う。本州は北海道と異なり、猟場が狭いため、射撃距離的に散弾銃で十分らしい。むしろ、ライフルを使用すると谷を超えた先にある谷の獲物を仕留めることになり、回収が難しくなってしまう。自分が使った道具を使うというのではなく、状況に適した道具を使用するのが重要だ。ライフルを構え、ゴルゴを気取るには北海道の広大な土地が必要なのだ。

実際にお二人に猟の仕方を聞いてみた。門脇さんは、猟の前日に狩猟道具を点検し、当日は獣道を歩き獲物を探す。獲物を見つけたら気配を消して射撃距離まで近づき、狙いを定めて撃つというスタイルだ。十分な量を集めたならやめることであり、沢山獲ることより、自分自身が楽しむことに重きを置いている。本間さんはグループで獲物をしとめる。巻き狩りといわれるスタイルだ。4人が獲物を持ち伏せ、1人が獲物を追い込む。最近では雪が少ないため、獲物の足跡が難しいらしい。

日本全国における野生動物による被害は増えている。門脇さんの住む厚真町も本間さんの住むみなみ町も猟師と地域が協力して、駆除に努めている。そのため、狩猟を趣味として行う人が駆除も担うという状況が生み出されている。本間さんは「狩猟と駆除では獲物に対するスタンスが違う」と語る。そのような状況下でも、お二人の狩猟は狩猟動機は「楽しい」という感情である。お二人のお話を聞いて「楽しい」という感情の偉大さを考えさせられた。お二人にしか聞けない「リアル」をありがとうございました。（ ）※4

今回は、月高生にジビエについてアンケートを取った。ジビエとは、フランス語で「狩猟で捕獲した鳥獣の肉」のことである。

①ジビエ料理を食べたことがありますか？

はい：8票 いいえ：51票

食べたことが無い人が大多数のようだ。

②「（いいえ）」と回答した人！その理由は？

「機会がない」「ジビエを知らなかった」など、ジビエが身近な存在ではないことを示唆する回答が多かった。近年では、ジビエ・狩猟の認知度を上げることと、狩猟への理解を求める啓蒙活動が求められている。

③北海道でエゾシカが増えすぎていることは知っていましたか？

はい：25票 いいえ：34票

北海道に住んでいるにも関わらず回答者の大半が知らなかった、という衝撃的な結果が出た。エゾシカの環境問題については、『エゾシカFuture』を読んで、理解を深めてほしい。

④近年、エゾシカが天然資源として注目されているのを知っていましたか？

はい：15票 いいえ：44票

実は、エゾシカには食肉としての活用以外にも、多くの活用価値があるのだ。これは「革」の記事にまとめたので、ぜひ読んでほしい。

ジビエはまた身近な存在ではないということ、エゾシカについて知っている人は少ないということが分かった。特にエゾシカの問題については、北海道に住んでいる以上知っていても損は無い筈だ。これを機に、興味を持ってくると嬉しい。（ ）



私たちがアイヌの人々を史料の上で確認できるのは、およそ15世紀からのことである。そのころ、アイヌの人々は漁狩業や植物採取を主な生業にして暮らしていたとされる。本記事では、そんなアイヌの人々の暮らしの一部である狩猟についてお伝えしよう。アイヌの人々の狩りはクマやサケばかりをとっていたと考えられがちだが、実際は多種多様な生物をとっていたのだ。では、どのようなものをもって暮らしていたのだろうか。

その答えは、私たちの周りを見渡してみるとわかる。例えば、山があり、川があり、海がある。そのような、身の回りの自然の全てをうまく利用しながら、そこからいろいろなものを得ていたのだ。つまりは、山ではシカやキツネ、タヌキ、そしてクマなどの毛皮を持つ獣、他にはタカなどの鳥も盛んにとっていた。川では、主にサケやマスがとられ、他にはウグイやイトリなどがとれていた。海では、地域によるが、ウミガメ、メカジキ、クジラ、イルカなどが盛んにとられていた。ところで、狩猟というと日々の生活の材料や食料として利用されていたと考えたが、アイヌの人々のとった獲物の毛皮などは交易のためにも利用されていたのだ。キツネやワシの羽などはほとんどが交易品として利用され、鉄の鍋や小刀などと交換された。このことは、アイヌ文化を考える上で非常に重要である。

アイヌの人々は狩猟の際に様々な技術や知恵を用いていた。例えば、シカを捕獲する際には、罠を使ったり、一斉に押し込むような作戦をとったりしていたという。他には、野鳥を狩る際には、捕獲しながらも声を出さないようにしたり、捕獲した鳥を無駄に食べたりとろすぎないように慎重に扱っていた。こういった自然に感謝し、とろすぎないように注意する考え方は豊かな生態系を守るために役立っていた。現在、私たちの社会では森林伐採など、あまりに頻りに繰り返すことにより起きる問題が多く発生している。もしかすると、より良い生活をするために必要なのは、全てを手にしうとはせず、あえて必要最低限のことだけをしてみることもかもしれない。

今ではアイヌ文化に基づく狩猟を行い、生業とすることは難しい。しかし、今もなおアイヌの文化を継承している人たちがいる。アイヌの人々の狩猟行為は、自然を尊重する文化をもつアイヌの人々の生き様そのものであり、その文化を学び、自然を大切にしたい考えを大切にしたいものである。（ ）※5,6,7



動物、というカテゴリの中ではかなり強い存在として考えられている熊。その一方で熊を狩る狩人も存在する。近年、狩猟を始めた若者がテレビで紹介されるなど、日本全国で狩猟が著しく広まっているため、熊に対して興味を持っている人も多いだろう。

日本に生息する熊はツキノワグマ、そしてヒグマの2種類に分けられる。ツキノワグマは本州、ヒグマは北海道に生息している。他に両者の違いは、ツキノワグマは真っ黒でヒグマは茶色であることや、ヒグマはツキノワグマよりも大きく、体重も3倍程度になる。凶暴性もヒグマの方が強い。最近ではコードネーム「05018」というヒグマが有名だ。目撃もされず、罠にもかからない。これは特例ではあるものの、いかにヒグマが賢い動物なのか伺えるだろう。

ツキノワグマは絶滅の危険性が高いとされ、地域によっては狩猟が禁止されているが、ヒグマの場合はそうではないため、現在も北海道では熊の狩猟が可能である。しかし、熊を狩る際には注意が必要だ。熊は音や匂いに対して敏感であり、縄張りに入るなどの行動を取ると攻撃してくる可能性がある。また、熊は状況に応じて走る速度が非常に速く、人間を追いかけける可能性もある。そのため、熊を狩猟する場合には十分に熊、そして自然への深い知識を持っている必要がある。

それと同様に、熊の狩猟には銃免許など公的な許可が必要となる上、クマも一匹の生物である、という意識を持つことが大切だ。熊が減るということは、熊と暮らす他の生物にも大きな影響を及ぼす。熊を狩る、という言葉一つにはあまり大きな意味は感じられないだろう。しかし、それがいかに大きな責任を持っているのかを理解しなければ、きっと極めて悪い結果をもたらすだろう。

今回、熊についてお話をしてきたが、熊はとても恐ろしい存在として捉えられがち動物だ。しかし、その恐ろしさを理解し、正しく恐れることによってその生態を守ることも可能であるといえる。ぜひ自然の流れの中に身を置いてみてはどうだろうか。（ ）※3

うまい!!鹿肉(もみじ)の味

数少ないジビエを食べる機会。私たちが狩猟について調べていく中でジビエの虜となっていた。そこで、月高生を代表して実際に鹿肉の缶詰とジャーキーを食べてみた。

和エゾシカを食す大 美味しそ 旨く前にお店 肉を食べてみる 1缶600円!! ぜびご堪能あれ!!



北海道における狩猟について、そしてエゾシカの今後について、酪農学園大学の伊吾田宏正准教授にインタビューを行った。

①猟師の高齢化が進むとともに、狩猟免許の発行数が減っていると聞きましたが、このまま狩猟従事者の数が減ると、人間社会や自然界にどのような影響がありますか？

全国の狩猟免許所持者数は2003年から2012年度頃まで減少していましたが、その後微増しています。また、北海道における年代別の狩猟免許交付状況を見てみると、40代以下の割合が2006年度の24%から、2021年度には44%まで増加しています。よって、狩猟者の高齢化・狩猟従事者の減少には歯止めがかかっているとと言えます。しかし、道内のエゾシカの個体数は依然として増加傾向にあります。捕獲数が足りていないため今後さらにエゾシカが繁殖し、農林業被害や交通事故の原因となってしまう恐れがあります。

森林被害の原因となる動物の7割はシカだというデータがある。(林野庁:野生鳥獣による森林被害)適正な生態系に戻すために、迅速な対応が必要だ。

②(2010年の道庁のデータより)エゾシカが捕獲されても、その30%が廃棄されてしまふとききました。廃棄率を低くする方法は具体的にどうするとよいのでしょうか？

2017年度および2018年度には、17%が食肉処理施設に搬入され、42%が自家消費、6%がペットフード、そして35%が廃棄されています。廃棄率を低くするには、食肉処理施設に搬入する個体数を増やすのと、自家消費の個体数を増やすことが重要です。農作物被害を抑制するために有害駆除されている個体の多くが、利用されずに廃棄されていると思われるので、有害駆除個体を計画的に有効活用する体制整備が必要となります。

どうせ駆除するのなら、無駄なく活用したいものだ。日本では、駆除した害獣を十分に活用されていない。そこで、具体的に日本でも何を愛していればよいか聞いてみた。

③イギリスでは、先進的なシカ管理が行われているようですが、イギリスと比較して、日本でのシカ管理で特に遅れている点はどこでしょうか？

イギリスを含むヨーロッパでは、シカが生息する森林の多くが猟区になっていて、ディアーマネージャーと呼ばれる専門家が配置され、計画的にシカの個体数管理がされています。猟区には、捕獲個体を一時保管する保冷庫が完備されていて、捕獲されたシカの7割が食肉処理施設に搬入され、残りの3割は自家消費され、廃棄は殆どありません。このように、シカを天然資源として持続的に活用する体制が整備されていない点が、日本では特に遅れていると思います。

日本ではシカの管理だけでなく、森林の管理もままならない。環境保全は勿論大切だが、豊富な資源を活用する体制の整備も大切なのではないだろうか。

④持続的にシカの個体数管理をするために必要なことは何ですか？

2021年度に捕獲されたエゾシカの76%が有害駆除の枠で捕獲されています。(残りは狩猟の枠)有害駆除に参加した狩猟者には、国の交付金に基づいて1頭あたり数千円〜一万数千円の報奨金が支給されます。農林業被害を防止する上で、エゾシカの個体数管理はこの報奨金制度に依存しているといえますが、国の税金を投じて、シカの死体のゴミを生産してしまっていると考えることができず、これは倫理的にも、国家的にも適切でないと思います。捕獲個体を食肉処理施設が買い取り、天然資源として持続的に活用することで、報奨金制度に頼らず捕獲を推進するような新しい体制整備が必要だと思えます。

シカは繁殖力が非常に強く、一度減らしただけではすぐに増えてしまうので、持続的な個体数管理が重要だ。

今回のインタビューで、エゾシカによる環境破壊は一般に知られているよりも深刻な状況にあるということ、害獣駆除と活用の両方において、持続的システムの構築が必要不可欠であることが分かった。超えなければいけない壁は多いが、国土の多くを森林が占める日本で、これらの問題を見てみぬふりはできない筈だ。今後、シカが「害」になるか「益」になるかは、私たちの手に委ねられているのだ。

最後に、ご多忙の中回答して頂いた伊吾田准教授に、図書館一同感謝申し上げます。ありがとうございました。（ ）